



北海道バスケットボール協会  
指導者育成専門委員会  
2014/08/29(金)

タクティクス (HBA指導者育成専門委員会ブログ)

NO. 153

## 北海道中学校体育大会で感じたこと

北海道バスケットボール協会  
審判委員会 田中 充

8月1日から3日にかけて、旭川大雪アリーナと旭川市総合体育館を会場に「第44回 北海道中学校バスケットボール大会」が開催されました。大会期間中は猛暑の中、当番校である旭川市立忠和中学校を中心に旭川地区協会、旭川地区ジュニア連盟、北海道ジュニア連盟の皆様のご尽力により、無事に大会が終了いたしました。大変お疲れ様でした。

さて、大会期間中、北本指導者育成委員長より TACTICS の原稿依頼をいただきました。テーマは「全道中体連を見て感じたこと」でした。昨今の情報化社会の中で、文章にして配信するという事は、書き方・捉え方によっては拡大および違った解釈を与えかねないと感じているのも正直なところでしたので引き受けるかどうかは迷いましたが、これから全国大会へ出場するチームに改めて「確認」して欲しいことや、新チームに切り替わった時に大切にして欲しいことを「確認」できればと思い、我々審判員も含め、バスケットボールに携わるすべての方々が日頃読んでいるであろう「ルールブックの内容を確認」する場とさせていただきます。

バスケットボールはどうしても身体接触のあるスポーツです。なので、ルールブックの第33条には「身体の触れ合い」について規定されています。

### ・33.1 プレイヤーの位置とシリンダーの考え方

→ プレイヤーがコート上で普通に両足を開いて位置

(ノーマル・バスケットボール・ポジション) を占めたとき、そのプレイヤーが占めている位置とその真上の空間をシリンダーという。

シリンダーの範囲は、次のように決められる。

- |                           |
|---------------------------|
| (1)前は、手を普通に上げたときの手のひらの垂直面 |
| (2)うしろは、尻の垂直面             |
| (3)両脇は、腕と脚(足)の外側の垂直面      |

ひじは曲げても良いが、手や足を前に突き出したり横に極端にひろげたりしてもシリンダーが広がったことにはならない。両足の間隔はプレイヤーの身長にもよるが、極端な広げ方をしてもシリンダーが広がったことにはならない。

ルールブックには、図とともに示されているのでそちらを見ていただいた方がわかりやすいのですが、これが【シリンダー】の考え方となります。また、この【シリンダー】の真上の空間の権利については以下の条項に記されています。

### ・33.2 真上の空間の権利

- |                                       |
|---------------------------------------|
| (1)ゲーム中、すべてのプレイヤーは、相手チームのプレイヤーが占めていない |
|---------------------------------------|

位置であれば、コート上のどのような位置でも占めることができる。  
この原則にはコート上に占めた位置およびそのプレイヤーが真上にジャンプした空間も含まれる。

- (2)自分のシリンダーからはずれた空間で、すでに独自のシリンダーを占めている相手チームのプレイヤーと触れ合いを起こしたときは、自分のシリンダーからはずれているプレイヤーにその触れ合いの責任がある。
- (3)防御側プレイヤーが自分のシリンダー内でジャンプしたり手や腕を上を上げていて触れ合いが起こっても、そのプレイヤーに触れ合いの責任はなく、罰が科されることはない。
- (4)攻撃側プレイヤーは… (中略) …正当な防御の位置 (リーガル・ガーディング・ポジション) を占めている防御側プレイヤーと次のような触れ合いを起こしては成らない。
  - ①腕で相手チームのプレイヤーを払いのけたりして、自分に有利な空間をつくること
  - ②ショットの動作中やショットしたあとに、腕や足を広げて触れ合いを起こすこと

この【シリンダー】の範囲がオフェンスプレイヤーだろうがディフェンスプレイヤーだろうが、“自分の空間”となります。あとはコート上で10人のプレイヤーがこのシリンダーの考え方をもちながら絶えず動き回ることになります。そうすると1個のボールを争う競技ですから、ボールのある空間を狙って必ず複数のプレイヤーが集まり、接触が起こるわけです。では、「ボールを持っているプレイヤーはどうやって守れば良いの？」の考え方として次の条項があります。

### ・ 33.3 正当な防御の位置(リーガル・ガーディング・ポジション)

- (1)防御側プレイヤーが相手チームのプレイヤーに向かい合い、両足を普通に広げて床につけたとき、その防御側プレイヤーは最初の正当な防御の位置を占めたことになる。
- (2)正当な防御の位置には真上の空間も含まれるので、真上の空間の内側であれば、まっすぐに手や腕を上げたり、真上にジャンプしても良い。

よく、ファウルを宣せられた後、コーチに「手を出すな」と言われているプレイヤーが居ますが、リーガル・ガーディング・ポジションを取らずに手を出せば、たいていの場合ファウルになる場合が多いものです。だから、ディフェンスは「ヘソで守る」なんていう言葉があったり、基本的にディフェンスのフットワーク練習などはトルソーがオフェンスプレイヤーに向かい合っている体勢で行うものが多いと思います。【ディフェンスの姿勢の基本となる根拠】がこの条文に書かれています。

今大会は中学生の大会でしたが、《強いドライブ》を多用するチームも多かったと感じています。では、「ドリブルをしているプレイヤーに対してどうやって守ったら良いのか？」について以下の条項に記されています。ここにはさらに、ボールを持っているプレイヤーが気をつけなければならないことも記載されています。

### ・ 33.4 ボールをコントロールしているプレイヤーとその防御

- (1)ボールをコントロールしているプレイヤー(ボールを持っているかドリブルをしているプレイヤー)を防御するときは、防御側プレイヤーは相手の速さと距離にとらわれずに防御の位置を占めることができる。
- (2)ボールをコントロールしているプレイヤーは、いつでも当然防御されることを予測していなければならないので、自分の進む方向に相手チームのプレイヤーがどれだけすばやく防御の位置を占めたとしても、止まったり方向

- を変えたりして身体の触れ合いを避ける用意をしていなければならない。
- (3) 防御側プレイヤーも、その位置を占める前からからだの触れ合いを起こさないように、相手チームのプレイヤーの進路上に相手より先に防御の位置を占めなければならない。
- (4) いったん正当な防御の位置を占めたプレイヤーは、相手チームのプレイヤーを防御するために位置を変えてもよいが、腕を広げたり、肩、腰、脚などを使ったりして脇を通るドリブラーを妨げてはならない。
- (5) 審判は、ボールをコントロールしているプレイヤーとその防御側プレイヤーとの間に触れ合いが起こったとき、次の原則に従ってチャージングかブロックングかを判定する。
- 次の状態で触れ合いが起こった場合は、ボールをコントロールしているプレイヤーに触れ合いの責任がある。

- ① 手チームのプレイヤーに向かって両足を床につけて最初の正当な防御の位置（リーガル・ガーディング・ポジション）を占めている。
- ② 御側プレイヤーが先に位置を占めていて、そのトルソー（胴体）に触れ合いが起こる。

正当な防御の位置を占めたプレイヤーは、負傷を避けるためや衝撃をやわらげるために、その場(シリンダーの内側)で向きを変えて相手に背を向けてもさしつかえない。

- ・ 防御側プレイヤーは、防御の位置を維持するためにその場で止まってもよいし、真上にジャンプしても相手の動きと平行に（横に）あるいは後方に動いても良い。
- ・ 防御側プレイヤーが相手と平行に（横に）あるいは後方に動くときに、片足または両足が瞬間的に床から離れることは通常の動きであり、引きつづき防御の位置を占めていることになる。

この条項から、ドリブラーに対してのディフェンスは、オフェンスより先に位置を占められるのであればどんなに寸前に防御の位置を占めても良いのですから、ヘルプやスイッチするディフェンスのタイミングや間合いなどは、これを元にチームで指導されるとアグレッシブなディフェンスになると考えられます。また、ボールをコントロールしているプレイヤーは、突発的なことに対していつでも止まったり方向を変えられる技術が求められるわけですから「視野の確保」をしつつ、「ボールコントロール」、「ドリブルの技術」そして、「ストップの技術」や「ディフェンスの状況に応じたシュートセレクション」を磨いていく必要があるということです。このようにオフェンスとディフェンスの技術がルールに基づいて、よりスピーディーかつアグレッシブに展開されることでバスケットボールのレベルアップにつながると考えます。

以上のように、【ルールブック】には色々なプレイの根拠となることが記載されています。ここでは紙面の都合で「ボールをコントロールしているプレイヤーとその防御」についてのみ触れますが、他にもルールの条文から指導のポイントとなる条項が多数存在します。

- ・ 【ボールをコントロールしていないプレイヤーとその防御】  
→ オフ・ボールのプレイヤーのカッティングへの対応の仕方など
- ・ 【ジャンプしたプレイヤーが下りるとき】  
→ リバウンド争いやレイアップショット時の対応など
- ・ 【スクリーン】  
→ 正当なスクリーナーのセットの仕方など
- ・ 【ノー・チャージ・セミサークル・エリア】

- ・【手や腕で相手チームのプレイヤーに触れること】
- ・【ポスト・プレイ】
- ・【後方からの不当なガード】

などなど

以上、第33条「身体の触れ合い」についての規定を見てきましたが、身体接触に対する条項はこの1条のみです。つまり、この第33条がバスケットボールにおける【からだの触れ合いを“判断”する上で基盤となる“考え方”】となります。これをもとに審判はコート上で起こりうる様々なプレイに対して以下の原則で判定を行っていきます。

#### <三確認主義>

- 触れ合いの《事実》を確認した（身体 or 身体の一部（手とか））
- その接触の《責任》はどちらにあるかを確認した。（過失割合もある）
- 結果として《影響》が出たことを確認した。（有利不利が出た）

ただし、プレイヤーもコーチもそして審判も人間です。当然ながら《完璧》ではありません。ですから、それぞれの立場でミスを少なくしていく、たゆまない《努力》が必要です。ルールブックのまえがきには次のように記載されています。

- ・プレイヤーは規則の精神の実行者である
  - ・審判は、規則を堅持してプレイヤーの足りないところを補いつつ、これに健全な方向を与えるとともに、そのゲームを公正にかつ円滑に運営することによって、すべての人に信頼されなければならない
  - ・観衆は、規則の良き理解者としてよいプレイに賞賛を贈り、よいプレイヤーを勇気づけるのが役目である
  - ・そしてチームの指導者は、ゲームの際の審判の役目を日常の練習の間に行ってプレイヤーを導くのである
- から、誠心誠意の努力をして規則の精神を自分のものとして身に付けていなければならない

道ジュニア連盟審判委員会では基本方針の一つとして、「審判としての眼を養うことで、指導者としての眼を養うことができる」というフレーズを謳っています。今大会稼働した審判員の多くは中学校の教員です。自校に戻れば、この大会を目指していた指導者でもあります。「コーチはコーチだけの仕事」、「審判は審判だけの仕事」をするのではなく、「コーチだからこそ、ルールを身に付けて審判ができなければならない」、「審判だからこそ、ルールを身に付けてコーチングができなければならない」と考えます。ルールブックは審判だけに必要なのではなく、バスケットボールに関わる者すべてが身に付けていなくてはなりません。この機会にぜひお手元にあるルールブックの内容について理解を深めていただければ幸いです。そして、プレイヤー、コーチ、審判、観客それぞれの立場でルールの精神を発揮するために協力していくことが北海道のバスケットボールを発展させる礎となります。今後とも皆様のご理解とご協力をよろしくお願いいたします。